

論文

こっくりさんは誰のものだったのか：19世紀末の流行時を中心に

Whose Practice Was Kokkuri-san? : Focusing on Its Popularity in the Late Nineteenth Century

吉岡 一志

YOSHIOKA Kazushi

Abstract

The purpose of this study is to identify the social actors who sustained the *Kokkuri-san* boom that emerged in the late nineteenth century. Previous studies on *Kokkuri-san* have predominantly taken one of two approaches: either treating *Kokkuri-san* as self-evidently belonging to children's culture, or focusing on its popularity during the Meiji period and interpreting it as a form of adult entertainment. Drawing on materials related to *Kokkuri-san* up to the end of the nineteenth century, this study analyzes how children and adults were involved in *Kokkuri-san* from a relational perspective. The analysis demonstrates that the practice of *Kokkuri-san* was deeply embedded in everyday life and widely shared, without a clear separation between children and adults. At the same time, among members of the educated classes, an emerging tendency can be observed to downgrade *Kokkuri-san* by reclassifying it as a children's game.

キーワード

こっくりさん、占い、子ども文化、大人-子ども関係

Key words

Kokkuri-san, Divination, Children's culture, Adult-child relations

1. はじめに

子ども文化研究においては、これまで子どもの主体的、能動的な世界経験に注目する傾向があった。古田(1997)や藤本(1985)は、子ども独自の世界経験を焦点化する研究の嚆矢であった。そこでは、子どもは、学校、教師、親といった教育の担い手からの抑圧が前提とされ、子どもだけの自由な世界での経験にこそ目を向けることが目指された。

ところが、その一方で、子ども独自の世界が強調されるあまり大人の存在が見落とされてきた(吉岡2021)。確かに、常に子どもは抑圧に甘んじるだけでなく、主体的、能動的にふるまう側面があることを見落としてはならない。しかし、子どもは大人から絶対的全体的自律性を有してはおらず、大人に合わせたり、模倣したり、目を盗んだり、抵抗したりしながら生活を送っているのである。したがって、子ども文化は、子どもだけの閉ざされた世界ではなく、大人も共に生きる世界の中で理解していかなければならない。

このような関係論的視点で子ども文化を捉えようとするならば、子ども文化を普遍的な子どもの占有物とみなすことはできなくなる。アリエス(1980)やElias(1998)が指摘するように、子どもは社会関係の網の目の中でその位置づけを変化させる存在である。だとすれば、子ども文化も普遍的なものではなく、その意味や担い手も変容していくだろう。

すなわち、現在一般に子どものものと考えられているもののなかには、大人も子どもも区別されることなく親しんでいたものがあるだろうと考えられる。こうした視点は、既に柳田国男が1924年に「児童と昔」にて指摘していた(柳田1990)。つまり、かつては村社会全体のものであった神事が、信仰心の衰退とともに、若者たちの慰みものへ、さらには子どもの管轄へと変化していくという構図である。

ただし、柳田自身は、大人のものがいかにして子どものものになっていくのかというプロセスには、ほとんど関心を払っておらず、簡単に信仰心の衰退に触れる程度である。また、子ども文化史研究においても、こうした視点は皆無といってよい。むしろ、子ども文化史研究では、普遍的な子ども文化を歴史の中から掘り起こそうとする傾向にある。子ども文化は歴史的に変化するものとして捉え直さなければ、適切に理解することはできない。

そこで、本研究では、こっくりさんに注目する。こっくりさんは明治中頃に大流行するのだが、川村（1997）は「この時期、コックリさんに入れ込んでいたのは、大人たちだった」（p.23）という。その一方で、現在ではこっくりさんは子どものものとされるのがほとんどで、子どもが主な担い手とされる「学校の怪談」の一つとして、位置づけられている（日本民話の会学校の怪談編集委員会 1996）。かつて大人が入れ込んでいたとされるこっくりさんは、いまや子どもものものに変化しているのである。となれば、こっくりさんの流行を子どもの未熟さのみ還元することはもはやできなくなるであろう。

したがって、子どもと大人の関係性の変化に注目することが重要な課題となってくる。歴史的に子ども文化として変容をとげてきたこっくりさんに注目することで、子どもと大人の関係性の網の中で、子ども文化の位置づけを捉えることができるのではないだろうか。本研究では、大人と子ども関係性の中で、子ども文化を捉えることを目的とし、明治期のこっくりさんブームにおける大人と子どもの関与の在り方を明らかにしていく。

2. こっくりさんの先行研究

こっくりさんに関する研究は、決して少なくない。まず、こっくりさんがなぜ動くのかその科学的な原理を探求したものがあげられる（板倉 1978、中村 1994、大槻 1995、安斎 2004）。これらは、多少のずれを含みながらも1887年に発表された井上円了の『妖怪玄談』による説明をなぞるものになっている。ただし、何れも1974年以降のこっくりさんブームにあって、合理的思考に至らない未熟な子どもがその担い手として自明視されている。

その意味では、こっくりさんをめぐる他の研究領域も大きな違いはない。民俗学の立場から子どもがこっくりさんにのめり込んでしまう心性を探ろうとする近藤（1997）の姿勢は、初めからこっくりさんは子どものものであった。精神医学においては、こっくりさんをきっかけとした精神症状を呈した症例が蓄積されている（中島・山角・住吉 1976、日下部・中沢 1976、久場川・土屋・丸山 1990、今泉 1992など）。これらの報告にある症例のほとんどは中学生であり、子どもたちの「集団ヒステリー」というカテゴリーに留まっている。

一方で、こっくりさんを子どもものとする前提をとらない研究もある。文学研究においては、明治19年頃から始まるこっくりさんブームに焦点をあて、そこから派生する心霊主義の展開の様相を描き出した一柳（1994）の研究が、先駆的なこっくりさん研究として位置づけられる。フォスター（2017）による民俗学からのアプローチでは、こっくりさんブームに対する哲学者井上円了のまなざしを追い、近代国家へと歩み始めた日本における近代化と伝統との単線的ではない複雑な絡み合いを丹念に記述している。しかしながら、いずれの研究も、大人と子ども関係についてはほとんど関心を示していない。

先行研究の多くが、こっくりさんの担い手が子どもであることを自明視するか、無関心なものが多いなか、まさにこの点を批判的に検討しようとした注目すべき調査がある。今泉（1995）は、当時20～60歳代の1636名分のデータを分析し、1930年代から90年代にかけてこっくりさんの担い手の変遷を明らかにしている。ほぼすべての世代において、こっくりさんを知った時期が小学校であるとする回答が過半数を超えたこと、身近で流行した時期が小学校段階が最多であったことから、こっくりさんは戦前から「基本的に学齢期の遊戯」であると結論されている。

興味深いのは、太平洋戦争時に成人がこっくりさんを行っていたとする報告についての今泉（1995）の指摘である。今泉（1995）は、成人によるこっくりさんの実践について、戦時下の心理的危機が学齢期の遊戯を復興させたと見る。つまり、戦時中の精神的な不安が、こっくりさんという迷信に頼らざるを得ない状況

を作り出したというのである。今泉（1995）にとって、大人たちがこっくりさんに興じることは、戦時下という特殊な状況にある異常事態に過ぎないものであった。

確かに、1930年代にはこっくりさんは、子どもの管轄へと委譲されていた可能性もあるだろう。しかし、今泉（1995）には、もはや大人がこっくりさんを行うことを通常のこととは理解していない。それだけ、1990年代にはこっくりさんは子どものものであることが自明なものとして定着していると言えよう。それでも、質問紙調査など具体的なデータに基づいて、こっくりさんの担い手を再検討しようとした今泉（1995）の試みは、極めて独創的な視点である。

以上の先行研究を踏まえれば、こっくりさんの担い手について再検討していく必要があることは明らかである。川村（1997）が指摘するように、大人がのめり込んでいただけなのだろうか、その時子どもたちはどのようにこっくりさんにかかわっていたのだろうか。あるいは、大人の熱狂は、直ちに子どもの管轄へと移り変わったのだろうか。本研究では、こっくりさんに対する大人と子ども両方を視野に入れ、その担い手のありようを明らかにすることを目的とする。

3. 資料の収集方法

戦前のこっくりさんを検討する上で、20世紀への変わり目が一つの節目となる。明治期のこっくりさんブームは、1886年頃から全国的に流行し、1890年代末には概ね収束したように思われる。資料の収集方法は後述するが、こっくりさんに関する資料は、1887年の44件をピークに1888年から減少しはじめ、1899年にはわずか4件になる。その内の1件、大橋乙羽による『若菜籠』（博文館）には、「かこひの梅（廿九年作）」という詩が掲載されており、「こつくり様も、仕あきては」というブームの終焉を象徴する表現が採用されている¹⁾。さらに、1900年代に入るとこっくりさんと同じ原理で作用するとされる「プランシエット」の記述が増え、新たなブームの様相を呈していく。このことから、本研究では、こっくりさんが流行し始める1886年から1899年までの資料を参照することとする²⁾。

本研究では、全文検索が可能な「国立国会図書館デジタルコレクション」³⁾を中心として、「ざっさくプラス」「ディープライブラリ」など図書や雑誌のデータベース、さらに「朝日新聞クロスサーチ」「ヨミダス歴史館」「毎索」の各種新聞社の新聞記事データベースを用いた。その他『東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧』（大空社）、『新聞雑誌に現れた明治時代文化記録集成』（時代文化研究会）、『新聞集成明治編年史』（財政経済学会）、『明治東京逸聞史』（平凡社）等を参照した。

検索の際、「狐狗狸」「こっくり」だけでなく、「コクリ」「こっくり」「こつくり」など、表記のぶれを考慮したキーワード検索を行った。以上のキーワードでヒットした文献すべてに目を通し、頷きや居眠りを表わす擬態語、色合いの深みを表わす副詞などの用例を除外した。また、翻訳された外国文学や辞書類は本調査では対象外とした。広告については、掲載されている文献の収集のために確認したが、広告そのものは分析の対象とはしていない。

以上の各種データベースや資料集から得られた資料群、さらには、先行研究で参照されている資料からたどれる限りの資料を収集した。その結果得られた資料数は、123件である。なお、1893年発行の骨皮道人『狐狗狸之理解』など、原本または原本のコピーが入手できなかったものでも、後年の資料に引用され、部分的にでも内容が確認できるものは分析に加えている。その場合、注や引用参考文献で、二次資料である旨を明示する。

4. 分析

（1）恐怖を伴わないこっくりさん

現代のこっくりさんは、恐怖を伴う危険な遊びとみなされる。こっくりさんがもたらす恐怖の感情は、大人と子どもの関係性に大きな影響を及ぼすと考えられる。例えば、怖がる子どもと、怖がらない大人という二分法を生みだしたり、あるいは、恐怖によるパニックを回避させようと子どもから遠ざけるといふるまいを促したりすることもあり得る。したがって、こっくりさんをめぐる子どもと大人の関係を検討する際、

恐怖は見落とすことの出来ない要素である。

しかし、先行研究では、明治期のこっくりさんは恐怖と結びついていないという指摘が多い。一柳（1994）は、当時のこっくりさんは恐怖よりも「娯楽的な要素」が非常に強い、「もっともトレンドリーな「遊び」（カウンター・カルチャー）」（p.27）だったと指摘する。1980年代のこっくりさんの受容について検討した大道（2022）は、明治のこっくりさんブームについて「今日まわりつく恐怖の要素は、初発の段階では希薄だった」（p.196）という。

現時点では、いつからこっくりさんが恐怖を帯びるようになったのかは明らかにされていないが、恐怖をもたらす理由としては、召喚された霊は「言うとおりにしないと祟る」（一柳 1999 p.88）という側面を持っているからだとの指摘がある。一柳（1999）は、こっくりさんが狐、狗、狸という字を与えられたために、憑物信仰の体系に取り込まれ、恐怖の招霊システムへと変貌したという。つまり、狐、狗、狸をこっくりさんの正体であると位置づけるからこそ、それらの憑依を人々は怖れるということになる。しかし、明治のブームにおける最初期からすでに「狐狗狸」と表記されている以上、なぜ、当時のこっくりさんは恐怖が前景化していなかったのかは説明が必要であろう。

東京で流行する以前のこと、1886年6月3日『朝日新聞』（大阪、朝刊）には「狐狗狸さんの祟り」という記事が掲載されている。北新地のある芸妓は、同僚がこっくりさんに没頭していることを「馬鹿気たること」と批判的に眺めていたものの、突然憑依現象に見舞われたという⁴⁾。

フト此婦人自分の身に狐狗狸さんが乗移りたりといひ出し、大声を挙げて、我は狐狗狸なり。余り我を疑ふに依り其疑を晴さんために来りしなり。何なりと尋ぬる事のあれば尋ぬべしと叫びつゝ家の内を狂廻るので一同大に困り、モウ決して疑ひませぬから早くお帰り下され。狐狗狸さん／＼と平身低頭にて頼めども一向頓着なく矢張り同様に狂ひ廻るゆえ、此上は何分にも諂諛して早く帰つて貰ふに如くはなしと俄に赤飯や餅を供へて段々頼み居るとなん。アナおそろしの狐狗狸さん。否おろかの妄信家。

同記事は、こっくりさんを契機として憑依現象が生じたとする最古の報告例である。現代でもこっくりさんに憑依されるという恐怖体験がしばしば語られる（安斎 2004）。ところが、引用した記事では「アナおそろしの狐狗狸さん。否おろかの妄信家」と締めくくられており、いわゆる狐憑きの事例は、恐ろしいものというよりも、愚かな妄信に対する批判としての側面に主眼が置かれている⁵⁾。ここに恐怖をもたらす深刻さはほとんど読み取れない。

憑依された芸妓の周囲はというと、困惑をしている様子がかがえる反面、こっくりさんが芸妓から離れるよう懇願し、「平身低頭」して、へつらい続け、赤飯や餅を用意している。もちろん、こうした対処法が「妄信」として非難されているのだが、このことは一方で、人々が憑依現象に対する対処方法を熟知していたことを示している。

川村（1990）が明治期の狐憑きについて「誰もが周知の出来事」と述べるように、記事の様子は、ごくありふれた事態であったと考えられる。当時の人々にとっての憑依現象はいたずらに恐れおののくものというよりは、対処可能な病の一つであったのである。「決して狐憑きは不可逆の治療不能な事態とはみなされず、世俗的な道徳によって非難されることはなかった」との川村（1990 p.75）の指摘は、上の引用に見られるような憑依現象に対して事態の収拾にあたる周囲の人々の手際の良さを十分に説明している。

1887年の『古今妙々文庫』（54）には、「コツクリの害」と題して、「英国新聞」の「コツクリ様に迷溺して癡狂院に送られたる仏人の記事」が紹介されている。これはこっくりさんへと「転化」したとされる「テーブルタルニング（机回り）」を試みた「仏国紳士」が、夜中に乱心して、包丁を持ったまま家を飛び出し、犬を殺そうと追いついていたところを警察に拘留されたというものである。医師の見立てでは「狂人に相違なし」とのことで癡狂院に送致されることとなったとある。

この事例は、憑依現象というよりは精神障害と言った方が適當だが、おそらくは、こっくりさんの危険性を指摘することで、そのブームに水を差すことが意図されていたのだろう。憑依現象にしても、精神障害に

しても、こっくりさんをきっかけに錯乱状態に陥る事例は、本研究で調査した資料群において、上記の2例しかないことは強調しておかなければならない。これらの事例は、後に引用されてもいない。こっくりさんが人々の精神に異常をきたすという想定は、一般的なものではなかったのではないだろうか。

このことから、当時、狐憑きや精神障害は、こっくりさんによって誘発されるものとしては認識されてはいなかったと考えることができる。つまり、上で引用した『朝日新聞』の記事は、狐憑きとこっくりさんが思わぬ形で結びついたところにニュースバリューがあったのである。また、こっくりさんが精神障害をもたらすという見方もやや飛躍があるものとして、受け入れがたい突飛な指摘だったのかもしれない。

田辺夏子は樋口一葉とともに、師である中島歌子の誘いに応じて、明治20年前後にこっくりさんに興じていたことを記録している。田辺（1950 p.34）の回顧によれば「狐だの狸だのと、それほど、重くるしい意味では無かつと思ひます」ともある。こっくりさんは、確かに「狐狗狸」と称されたが、それらが憑依して危害を加えたり、精神障害をきたしたりするという認識はなかったようである。

こっくりさんは、狐憑きの誘因として結びつけられていなかっただけでなく、狐憑きそのものも治る病として対処方法がよく知られているために、人々を震え上がらせるような事態でもなかった。こっくりさんは憑依信仰の体系に取り込まれたために恐怖をもたらすものに変貌したのではない。狐憑きへの対処方法が「妄信」として退けられ、対処不能、制御不能な憑依症状のみが残された時に危険なものになったのではないだろうか。

したがって、明治期のこっくりさんは恐怖を伴う憑依現象を引き起こす実践ではなかったのである。それゆえに、恐怖を基準として、大人と子どもが分割されることも、あるいは、子どもから遠ざけておく必然性もなかった⁶⁾。大人から区別され、こっくりさんに怯える子どもという見方は、20世紀以降に発生したものと考えられる。

（2）人々の選択を後押しする占い

むしろ、問題とされたのは、これら一連の出来事が「妄信」であることの方であった。明治以来人々の民俗的な信仰は、大きな転向を迫られていた。安丸（1979）によれば、1873年には、梓巫・市子・憑祈禱・狐下げなどが禁止され、翌年には祈禱・禁厭による医療行為の妨害が取締りの対象となっていた。1882年に施行された旧刑法では、「妄ニ吉凶禍福ヲ説キ祈禱・符呪等ヲ為シ人ヲ惑ハシテ利ヲ図ル者」に罰則が設けられることが明確化された。1887年に井上円了が『哲学会雑誌』、『妖怪玄談』を通して、いち早くこっくりさんを科学的に説明しようとしたのも、近代国家への急激な転換を強いられた後進国の文脈の中でのことである（フォスター 2017）。

そのため、多くの資料では、こっくりさんが迷信であることが強調され、妄信することそのものが批判される。1887年5月1日の『東京日日新聞』には「狐狗狸」という記事が掲載されている。

先頃より流行する狐狗狸ハ此程に至りて益々甚だしく、恰も昔時流行せし巫子の如く、今ハ遊戯に非ずして、縁談病気より百般の事を問ひて信用するものあり。又ハ軒並順番に毎夜十二時過ぎ迄も為し居るもありて、板橋、下谷、深川等にてハ、時々巡査の説諭を煩ハす事あり。此分にてハ禁止の令を見るも近きにあるべしと或人いいへり。

上記引用を見ると、夜中まで行われるこっくりさんに「巡査」が介入している。すでに前年7月16日の『朝日新聞』（大阪 朝刊）では、こっくりさんに用いる竹を販売していた噺家が事情聴取を受けていることが記されている。その後の噺家の処遇は明らかではないが、先の旧刑法による「人ヲ惑ハシテ利ヲ図ル者」に抵触していたと思われる。上記の引用も同じ文脈にあると考えられるものの、警察の介入は「説諭」に留まっている。

当初、各種迷信に対して非寛容な取締りが行われていたが、明治10年以降になると、民間信仰などの迷信を扱う新聞記事は減少し始め、また行政による取り締まりも、その厳しさを緩和させていったとされる（荻

野 2012)。こっくりさんは国家が推進する文明開化に反するものではあったものの、ある程度黙認されるようになっていたと言えよう。国家の威信をかけた政治的、医療的な側面に深刻な被害をもたらさない限り（川村 1990）、あるいは金銭的な利害関係が生じない限り（フォスター 2017）、こっくりさんは許容されていたのである。

この点を、フォスター（2017）は、「遊びという無害な文法」（p.147）に組込むことで、科学対迷信の闘争からすり抜けさせる娯楽実践へと移行したと理解する⁷⁾。したがって、「コックリの呼び寄せが多少なりとも大仰な真面目さをもっていることはほとんどなかった」（フォスター 2017 p.148）という見立てになる。しかし、その占いの内実を見ると、遊びを超える側面も見えてくる。こっくりさんの装置がひとりで動き出し、その上、その占いが「十中の八九は合する」（井上 1900 p.42）ものなのであれば、その不思議な魅力に惹きつけられ、夢中になってしまうこともあるだろう。しかし、だからこそ遊戯としての態度を超える人々のかかわりも生じ、妄信との批判が生じていたはずである。

上記引用で見られるこっくりさんの占い内容には「縁談病気より百般の事」とあるように、まさに「遊戯に非ず」という事態があげられている。1887年5月14日の『團團珍聞』に掲載された山陽亭藝生による「狐狗狸ノ跋扈」には結婚相手、年齢、盗難品の犯人、天気、籤の当否が占われるなどの事例があげられており、明らかに遊戯の閥を超え出た実践が記されている。特に多く言及されるのは、男女間の離縁にかかわるようなトラブルである⁸⁾。このように、人々の日常生活に直接かかわる重要な悩みが、占われているのである。

1887年3月21日の『群馬日報』に「之を遊戯として弄そぶは可なり。往時巫女の口寄せを為したる如く、妄りに信向して吉凶禍福の指示を託するに至つては愚も又甚だし」（群馬県史編さん委員会1979 p.639）とあるように、遊びとしてのこっくりさんの実践は認められている。だが、実際には、人々のこっくりさんの実践が、遊戯から逸脱する事例が目につくからこそ、各種メディアからの批判的になっているのである。

娯楽の側面がなかったとは言えないが、人々が真剣に自らの運命をこっくりさんに託す様子は当時のリアルな側面として見落とすことはできない。そして、その占いの内容から考えれば、明らかにこっくりさんの宣託に身をゆだねようとしているのは、大人たちであった。

もちろん、福沢諭吉のように原理を深く検討しないまま作為的なものと一蹴するものもいれば（清岡 1958）、坪内逍遙のように、こっくりさんが流行する以前から、カーペンターの“Principles of Mental physiology”に目を通し、その原理を理解した上で、流行を冷ややかに見ていたものもいる（坪内 1933）。福沢や坪内といった知識階層に限らず、高村光太郎の祖父のように、町人の中にも「下らぬ迷信のやうなこと」（高村 1958 p.28）を退けるものもおり、すべての人々がこっくりさんに盲目的に従っていたわけではない。

それでも、人々にとっては、人生の中の大きな決断の際には、こっくりさんは明確な指針を与えてくれる心強い拠りどころの一つであったことは否定できない。明治10年頃の流行神への参詣に対する人々の信仰心の様相について論じる萩野（2012）は「名所への参詣にしても、遊興と信仰のどちらかではない。遊興でもあり信仰でもあり、それが庶民の営みの一部であった」（p.209）と言う。この指摘と同様、こっくりさんへの人々の態度は、信仰か遊びかのいずれかに分節しがたいものであったと言えよう。

小説ではあるが、中村花瘦の作品には、人々が難しい決断をする際にこっくりさんを手がかりとしている姿が描かれている。登場人物の平作は身寄りを失うも、世間からは「狂気者」と陰口をたたかれるほど溺愛する愛馬とともに暮らしていた。ある時、平作は「傷寒」を患って床に伏せていたが、隣家の老婆が親切心から看病をしてくれたことで一命をとりとめたことを目覚めて初めて知った。医者や薬などにかかる蓄えもなく、費用をいかに工面したかを老婆に問いただしたところ、身辺を探ったが金目の物がなかったために、親戚ともども「こつくりと相談した上、背に腹は替へられずと」、平作の可愛がっている馬を売り渡す決断をしたという（中村 1893 p.73）。

当事者間で様々に議論し、それでも明確な結論に達しがたい時、人々は一つの選択肢としてこっくりさんの助言に判断を委ねるのであった。明治期は占いが人々の生活の中に深く根付いており、「市子」などが禁止になったこともあり、手軽に占いができるこっくりさんは民衆の決断を支える重要な装置であった⁹⁾。

こっくりさんは娯楽的な側面も含む大人たちの生活必需品だったのである。

(3) 大人から見た子どもとこっくりさん

大人たちがこっくりさんにかかわるとき、遊びだけでなく、真剣さがそこには読み取れる。では、子どもたちとこっくりさんとの関係はどのようなものだったのであろうか。ここからは、資料にあらわれた子どもとこっくりさんの関係を大人とのかかわりも視野に入れながら検討していこう。

子ども自身がこっくりさんに興じている様子を記した記録や子どもが直接的に感想を記したような資料はほとんどない¹⁰⁾。しかしながら、大人の記録の中からある程度、当時の子どもの位置づけをうかがい知ることが可能である。むしろこうした資料の中にこそ大人と子どもの関係が明確に表れている。

1887年3月29日を出版日とし、版元には山村鑛次郎との名が記された『幼童流行 こっくり踊り』という錦絵がある¹¹⁾。「幼童流行」というタイトルは、子どもたちの間で流行しているような印象を与える。錦絵には、こっくりさんに興じる10歳前後と思われる男児や10代後半に見える女性が描かれている。小島(1886)はこっくりさんに「狐狗狸」と名づけたのは「今だ学術上の思想なき品川遊所の芸娼妓」だと指摘する。「芸娼妓」に「こども」のフリガナが当てられているところを見ると、「学術上の思想」の多寡が「芸娼妓」や「こども」の社会的地位を決定づけていることがわかる。

しかし、これらの事例から、10代の子どもや女性が主なこっくりさんの担い手となっているという現実を表わしているものと理解することはできない。これまで見てきたように、こっくりさんは大人たちの運命の指針になるような内容が占われており、こっくりさんの担い手として大人たちの実践を確認してきた。だとすれば、こっくりさんと子どもを結びつける語りは、こっくりさんに興じている大人たちに対する皮肉と考えることができるのではないだろうか。

コックリは児女輩の遊戯同様のものにて近頃当府下にて流行の景況を見るに、書生輩の下宿屋に休日の晩には数名相会し、種々様々のことを問懸けて一夕の遊戯となし、市中にては往々歌舞音曲を交へてコックリとともに踊り戯むる等、実に笑ふべきの至りならずや

上記の引用は、井上(1900 p.10)が市井の人々のこっくりさんへの熱狂ぶりを嘲笑を含みつつ述べている部分である。この直前には、「老幼男女集りこっくり様の遊戯を為すを目撃」した様子を語り、多くの人々がこれを信じ流行する状況を嘆く三田(1887 p.12)の議論が引用されており、子どもに限らず多くの人々がこっくりさんに興じている様子が繰返し示される。したがって、ここで嘲りの対象となっているのは子どもではない。「コックリは児女輩の遊戯同様のもの」という表現は、こっくりさんに興じている大人に対してのものである。

自由民権や女性の権利拡張を解いた「政治小説」である上田捨吉による『社会進歩 蜃気楼』の中にもこっくりさんに対する同様の表現がみられる。珈琲店で、当時流行っていた「動物電気的作用」について講釈を垂れていたある紳士が「狐狗狸さんといふ詰らぬ小児の遊戯」も「電気作用」だと、ものしり顔で論じる様子が描かれている(上田 1886 p.47)。現代から振り返れば「動物電気」は疑似科学であるものの、当時においては最先端の科学用語であった。ここでもまた「小児の遊戯」はこっくりさんに興じる大人に視線が注がれている。

井上にしろ、上田にしろ、科学的に原理が説明できるこっくりさんに神秘性を感じ、盲目的に戯れる人々は嘲笑の対象でしかない。したがって、こっくりさんを子どもの遊戯と結び付ける言説は、近代化していく国家においてふさわしくない人々から、自らを卓越化する契機となっているのである。と同時に、子どもの遊戯を大人から分離しようとする欲望に支えられていることも見逃せない。

明治中葉には、大人と子どもの境界線は拡大しつつあり(元森 2009)、子どもの遊びが大人にとってはつまらないものとして、一段低く見られるようになっていたと考えられる。こうした背景の中で、こっくりさんを「児女輩の遊戯同様のもの」、「詰まらぬ小児の遊戯」として、それに熱狂する大人たちから引き離

すことで、近代国家にふさわしい新たな大人像が提示される。その結果として、こっくりさんと結びつけられた「児女輩」、「小児」たちは、大人と異なる子どもとして取り残されていくのだろう。ここでは、こっくりさんの実践をめぐって、大人カテゴリーが子どもカテゴリーから離陸し始めた様相を伺い知ることができるのである。

一方で、人々がこっくりさんを子どもの遊戯と位置付ける根拠がまったくなかったわけではない。それは、子どもが参加することによってこっくりさんの装置が動きやすくなるという当時の人々の認識である。井上が全国から集めた事例の中には、こっくりさんが作動しやすい条件がいくつか示されているが、なかでも「コックリ様は女子を好む」として「童女」を参加させることが推奨されている事例が目にとまる。宮城県ではそもそもこっくりさんを実行する際には「女児三人」が行うものとしている。こっくりさんの担い手について「血気熾なる者及び年若こどもに限るべし」（小島 1886）とする認識は広く浸透していたようで、大人とは異なる年少者の感受性が意識されている。

このことがこっくりさんの実践に子どもを巻き込むことになる。1886年6月15日の『朝日新聞』（大阪朝刊）には、まさに子どもが動員される様子が描かれている。夫の浮気の証拠をつかむため、その妻はこっくりさんに相談することを思いつくのだが、「二三日前の夜、日頃家に出入する某を頼み、狐狗狸竹三本を買求め、近辺の娘や子供を呼寄せ」るのである。つまり、大人たちは自らの命運を占うにあたり、子どもたちにこっくりさんの実践を協力させる必要があったのである。こうして子どもたちは、大人たちによるこっくりさんの実践に駆り出されていたと考えられる。

しかし、子どもが常時動員されていたわけではない。「是レ不信仰者及び虚心平気ノ者ニハ回転ヲ見ルヲナキ所以ナリ。故ニ婦人或ハ愚民ノ如キ信仰心ヲ起シ易キ者ニ最モ著シキ結果ヲ見ルニ至ルナリ」（河野 1892 p.40）、「三人の中必ず一二人の婦人を交ゆるを良しとする」（石田 1934）とも言われることもあり、こっくりさんのよき担い手から子どもがもれ落ちることもしばしばみられる。井上（1900 p.48）も言うように、「感動し易き性質を有する」属性は、子どもだけに限定されず、「信仰心の厚きもの、智力に乏しきもの、又は婦女子」など、様々な地位にある人々がこのカテゴリーに振り分けられていたのである。

その意味で、こっくりさんをめぐる大人と子どもの境界線は、まだ曖昧さを残したままであった。少なくとも、大人と子どもの間にこっくりさんの実践をめぐって線引きをしようとする意識は限定的なものであったと言える。

（4）家の中のこっくりさん

子どもは大人によってこっくりさんに巻き込まれるのを待つだけの存在でもない。年齢としては10代半ばではあるが、子どもが自ら主体的にこっくりさんに興じていたことを示す資料もある。例えば、巖谷小波（1870-1933）や寺田寅彦（1878-1935）などは、当時の日記が残されている。

巖谷小波は1911年の『少年世界』17（16）に「二十五年前の春」として日記を掲載している¹²⁾。1887年1月26日、当時16歳だった巖谷は、この日の夜兄の部屋で「狐狗狸様の実験」を行ったという。参加者は「兄や、姉や、妹等」であった。文脈から推測すれば「兄」が主導した実験だと思われるが、まずは前年の12月上旬にシンガポールを出港した後に消息不明となっていた日本海軍軍艦「畝傍艦の行方」を尋ねている。次に京都にいる姉の出産時期、巖谷の「試験の結果」、参加者の年齢や、その場にある道具類の数などが占われている。翌日27日には「昨夜のコックリの面白さに、学校でも皆に話して、ある先生の欠席を幸ひ、教場で盛んに行つて見」たという。その夜もまた、自宅の母屋で実施したようで、「常は自分でコックリを行う」と、一人でこっくりさんにふけていた様子が記されている。

寺田は、こっくりさんブームも落ち着いた1892年5月26日、土佐の地でこっくりさんを行ったことを記している（寺田 1937）。当時14歳で高等小学校に通っていた寺田は、学校帰りに姉が「狐狗狸三」をしているところに遭遇し、自らも行っている。翌27日、帰宅後に再び友人とともにこっくりさんを行い「大ニ之レヲ論ジ其忘ヲ破ル」とあり、その直後に「余ガ姉佛然色ヲ作ス矣？」とあるので、恐らくは科学的知見に明るい寺田が、こっくりさんが動く原理を科学的に論駁したために、姉を憤慨させてしまったのではないかと

思われる¹³⁾。

こっくりさんの不思議さに没頭する巖谷と、科学的説明により神秘性をそぎ落としてしまう寺田と、そのかわり方は対照的である。しかし、両者の実践に共通するところは、こっくりさんを家で行っており、そこに家族が居合わせていることである。巖谷がこっくりさんに興じているとき「宵まどひの女中達までが、為めにその眠気を忘れて」見物していたのだという。また、寺田が自宅でこっくりさんをやっていると「母及ビ徳モ来り見ル」とある。寺田の記述にある「徳」は女中ではないかと思われるが、親やきょうだい、女中といった家中のものたちが、こっくりさんに吸い寄せられているように見える。どちらも、子どもたちの実践が咎められている様子はない。

当時、こっくりさんが流行していることを表現する際、家はその舞台としてよく取り上げられていた。1887年3月19日発行の『團圓珍聞』(588)には「此頃隣家で毎日のやうにお出なさい、お婦んなさいなど、言ふ声があるからハテナ何か商売を始めたのかしらんと覗きに行たら、ヲヤ違つたりの一言を發する件で、當時流行の狐狗狸さんとか徳利さんとかいふものを遣て居るにぞありける」とある。1890年『江戸会誌』に「異撰動物類考」を寄稿する獨笑居士は、「家ごとにこれを設けて遊びとするほどなり」(p.69)と言う。高村光太郎の回想によれば「講中のやうになつてゐて毎晩のやうに近所の家にその集りがあつた」(高村 1958 p.28)という。つまり、こっくりさんは、大人と子どもが生活を共にする家の中で実践されるものであった¹⁴⁾。

それは、家族の娯楽としてだけでなく、家族の成員の将来にかかわる真剣な占いとして重要な位置を占めていたと考えられる。実業家の望月軍四郎(1879-1940)の運命はまさにこのこっくりさんに依拠した家族の話し合いの中で定められていた。1942年、武者小路実篤によって望月の伝記が執筆されている。1892年、軍四郎は家産が傾いたことで高等小学校を2年で修了せざるを得なくなる中、商売をして金を儲けることを思い立ち「番頭」になることを決意する。初めは家族の誰もが反対したが、それでも軍四郎の決心は揺るがないために、望みをかなえようとのことになった。そこで「何処に奉公にやつたらいいのか」が問題となり、こっくりさんに相談することになったのだという(武者小路 1942 pp.18-19)。

馬鹿氣たことに見えるが、皆真剣だつた。可愛い、子供の一生がきまるのだ。真剣にならないわけにはゆかない。心の内で祈りながら、蓋の上ののせられた手が一二三の合図ではなされた。こっくりさんの足は東京をさした。

之は皆が内心希望してゐたことだ。皆東京がいい、東京がいいのだと喜んだ。その結果軍四郎はとうとう東京ゆきにきまつた。

上記の引用は、当時の資料等を基にして作家が再構成した軍四郎の伝記の一節である。書かれていることをそのまま事実とするわけにはいかない。しかし、この伝記の作成は、軍四郎の子息たちが望み、実篤に直接依頼したものであるため、こうしたエピソードがあったことは創作であるとは考えられない¹⁵⁾。

現代社会ほどではないにせよ、明治期の人々にとっては、自身の人生の岐路は大きくその選択肢を広げていったであろうことは確かである。様々、決断をくださざるを得ない状況に直面するにあたって、個々の家々では、こっくりさんの宣託は大いに人々の支えになっていたと考えられる。こうした決断を迫られる契機の中には、子どもの将来に関する悩みも重要な位置を占めていたのだろう。軍四郎の奉公先に限らず、井上(1900)があげるこっくりさんの占い内容の事例の中には、「自分の道楽子息の放蕩の止むか止まざるか」(p.28)といった家の将来を案じる切実な思いが認められる。

こっくりさんは、家の中でその将来にかかわる重要な選択を占う装置であり、娯楽としての側面があったにせよ、大人も子どもも隔てられることなく実践されていた生活必需物であったと言えよう。それゆえ、子どもだけでこっくりさんを実践することもあるが、それは決して大人の目をかいくぐって秘かに行われるものではなく、大人と子どもそれぞれの生活の中で実践されているにすぎず、両者は生活を共にする家の中で共有されるのである。

5. まとめと考察

本研究では、明治期のこっくりさんブームの担い手が誰だったのかという点について、大人と子どもの双方の姿を明らかにしてきた。調査の結果から明らかになったことは、次の3点である。第一に、当時のこっくりさんは恐怖を伴う危険なものではなく、それゆえに大人と子どものかかわり方の違いに大きな影響を及ぼすものではなかったことである。第二に、こっくりさんは大人たちの人生の岐路において、その選択を後押しする重要な占いとして日常生活の中に根付いていたことである。第三に、こっくりさんは、大人たちの実践に巻き込まれながらも、子どもだけで実践することを咎められることなく、家の中で老若男女が分け隔てなく入り混じって実践していたことである。

明治期のこっくりさんについては、これまで娯楽の側面が強調されてきた。しかしながら、本研究では、生活に根差した真剣な占いの一つであったことを指摘した。真剣な取組であったからこそ、当時の新聞記事や知識人たちはその「妄信」ぶりを非難する必要があったのである。確かに熱狂的なブームは、こっくりさんの新規性、神秘性に惹きつけられた娯楽の側面に強く後押しされたことは否定できない。しかし、重大な選択を迫られる局面において、市子などの民間信仰を禁止された当時の人々にとって、こっくりさんは指針を与えてくれる欠くことのできない占い装置であった。だからこそ、短期間の熱狂の後もこっくりさんは残り続け、戦中、戦後を経て1970年代のブームへと引き継がれることになったのではないだろうか。

このことは、こっくりさんが家で行われていたことと無関係ではないだろう。そこでは大人と子どもが隔離されることなく共有されていた。さらには、子どもたちの進路選択といった家にとっての一大転機となる局面において、こっくりさんが持ち出される。家の人々は、自らの運命をこっくりさんの「脚」に託すのであった。こうしてこっくりさんは、一過性のブームとしてではなく、各家々の日常生活の中に根を下ろしていったのである。そこには、子どもだけがこっくりさんの担い手であるといった大人との断絶はない。

しかし、一方で、子どもから卓越化しようとする大人たちの欲望もまたこの明治半ばのこっくりさんブームに現れている。大人も子どももこっくりさんの担い手であるという実態とはうらはらに、それを子どもの遊戯だとしてその社会的地位を貶めようとする知識人の言説は、近代国家にふさわしい新たな大人像の創出を目指す試みに他ならない。ここではまだ、大人と子どもの明確な二項対立が成立していたわけではなく、女性や、学歴のない者が、子どもと併置されていた。女性の社会的地位の向上や、就学率、上級学校への進学率の上昇は、その後、子どもだけを置き去りにしていくのであろう。

明治期のこっくりさんをめぐっては、その妄信ぶりを基準として大人と子どもが未分離な状況から、大人が離脱しようとする局面を捉えることができた。今後、いかにして大人が子どもから切り離されていくのか、そして、1970年代のこっくりさんブームにいかに接続されていくのかを検討していく必要がある。

注

- 1) 同書は、1888年に初版が発行されたものであり、1889年の第3版を参照している。
- 2) 井上(1900)によれば、こっくりさんは1884(明治17)年に下田近辺で難破したアメリカ船の乗組員から、当時米国で流行していたテーブル・ターニングが伝えられ、広まったものとしている。一方、凌空野人(1887)は、1883年にアメリカ留学から帰国した理学博士の益田英作氏が、翌年に「新吉原」で披露したことから流行したとする。村田(1989)は、「明治十七年以来益々流行」と神戸での流行を記録しており、日本での流行の起源についてははっきりしない。1885年以前の資料に、こっくりさんに言及しているものは見つかっていない。
- 3) 「国立国会図書館デジタルコレクション」は、断続的に資料を追加しており、多い時には一度に10万点を超える資料が一挙に追加されることがある。したがって、資料の収集に際限がないため、2024年5月27日時点の検索結果をリスト化し、分析の対象とした。なお、2025年12月19日に再検索し、追加された資料を補った。
- 4) 以下、引用に際しては、読みやすさを優先し、旧字体を現代の表記に改めるとともに、句読点も適宜補っている。また、原本にあるフリガナは省略するが、分析上必要な部分は原本通りに付す。

- 5) 『人身電気の図画』の著者である小島百三の回顧録によれば「種々金銭を掛ける賭博を行ふなぞ良俗を害するものが続出し、官憲で全国一般にコックリサンの印刷物発売の禁止をした」(小島 1939 p.78)という。その時期ははっきりしないが『人身電気の図画』を発行していたともあるので、1886年ごろと推定される。1883年には、出版条例や新聞紙条例が改訂され、治安や風俗の頹廢に対する取り締まりの目が厳しくなっており(山本 1998)、メディアは迷信の助長を抑制する方針をとらざるを得なかったと考えられる。また両条例は1887年にも大幅な改正が行われており、小島の言う発禁はこのタイミングと考えられる。
- 6) そもそも恐怖を子どもから引き離そうとする感性すら、この時代にはなかった可能性も十分にある。このことは別途検討を要するが、少なくともこっくりさんが危害を加えるものとして、子どもの実践が禁止されるようなことはなかった。数こそ少ないものの、子ども向けにこっくりさんが紹介されることもある。小学生を対象にした教育書を多く記している谷口(1887)は、『翠紅奇縁』という「学芸小説」の中で、こっくりさんに興じる15、6歳の少女たちの姿を描きながら、彼女らにこっくりさんの遊び方や歴史、その原理まで語らせている。また、1896年の『少国民』第8年(2)にもこっくりさんについて短い紹介が掲載されている。いずれも井上円了の『妖怪玄談』をなぞるものとなっており、「毫も不思議」(谷口 1887 p.127)ではないものとして、子どもたちに提供されている。
- 7) 「市子」などによる「口寄せ」をめぐる実践にも、娯楽的要素が多分にあったことを示した今井(2013)の論考のように、前近代の人々の迷妄ぶりが自明視される傾向を問い直す研究が、近年しばしばみられるようになってきている。しかしながら、信仰と娯楽を二項対立図式に配置してしまうことは、その中間の様態を見落としかねない。
- 8) 男女間のトラブルは、比較的取り上げられることが多く、1886年6月15日の『朝日新聞』(大阪 朝刊)には、「狐狗狸竹でポンコツ」の記事がある。芸娼妓を妻に持つある男性が、別の女性をかこっており、妻がコックリさんの宣託により証拠をつかんで激怒するというもの。翌年3月23日の『群馬日報』「コックリは月下氷人か」の記事には、村の「壮年」が同村の娘とコックリさんに興じた晩に失踪したという出来事が報じられている(群馬県史編さん委員会 1979)。また、『妖怪玄談』には『やまと新聞』に掲載されている夫婦間の葛藤がこっくりさんによって引き起こされかねない事例が引用されている。さらに1874年生まれの医学者である田中香涯も、流行時を回顧するなかでこっくりさんの宣託により離縁したものがいたことを指摘している(田中 1923)。
- 9) 1946年から翌年にかけて文部省科学教育局によって実施された全国調査では、「おみくじ」や「占い」をやったことがあるとする者は、都市部と農村部はともに27.2%となっていた。さらに、やったことがあるとする者の動機を見ると、「信じてやる」への回答は、学歴、地域、年齢、性の属性を問わず、そのほとんどが50%を超える結果を示している(千家 1979)。占いへの依存は容易に拭いがたいものであると言える。
- 10) 子どもたちが記した日記がある程度残されているが、そのほとんどは中学生(旧制)以上のものに限られる。小学校以下の子どもたちがこっくりさんの体験を記した資料は皆無といってよい。一方で、回顧録や伝記といった形で、幼年期のエピソードをうかがい知れるものが散見される。
- 11) 「ARC浮世絵ポータルデータベース」を参照。<https://www.dh-jac.net/db/nishikie/results-big.php?fl==MRAH-JP.06583&fl1=1&enter=portal> (最終閲覧日: 2025年12月26日)
- 12) 『少年世界』に掲載された日記は、当時の日記を再構成したものである。当時の日記は桑原(1998)に全文の翻刻が掲載されている。日記には明治20年1月26、27、29日、4月9、10日に、こっくりさんを行った旨が記載されている。なお、本文での巖谷に関する引用は、すべて『少年世界』からのものである。
- 13) 「忘」は「盲」の誤字だと思われる。「盲を破る」を蒙を啓くという意味に解した。
- 14) 今泉(1995)の調査によれば、こっくりさんについて「主に遊んだ場所」への回答は、20~30代の8割以上が「学校」と回答しているのに対して、50~60代は、学校との回答も3割ほどあるものの、「家庭」は5割を超える最多項目となっている。戦前までは、家でこっくりさんを行うことが主流であったと考えられる。
- 15) なお、望月の甥にあたる望月孝もこのエピソードとほぼ同様の内容を記している(望月 1953)。望月孝は1890年生まれであるために、軍四郎のこっくりさんの実践には直接立ち会っていたとしても記憶はないは

ずである。しかし、武者小路が「こっくりさん」と表記していたのに対し、望月孝は「おこっくりさん」としている。おそらくその地方の呼称だったと思われる。その点から考えれば、親族中の語り草として繰り返し語られてきたエピソードを記憶していたのではないだろうか。

引用参考文献

- 安斎育郎, 2004『こっくりさんはなぜ当たるのか』水曜社。
- アリエス, フィリップ, 1980『〈子供〉の誕生：アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房。
- Elias, Norbert. 1998. "The civilizing of parents." In *The Norbert Elias Reader*, edited by Johan Goudsblom and Stephen Mennell, Oxford: Blackwell, pp. 189-211.
- フォスター, マイケル・ディラン, 2017『日本妖怪考』森話社。
- 藤本浩之輔, 1985「子ども文化論序説：遊びの文化論的研究」『京都大学教育学部紀要』31, pp.1-31.
- 古田足日, 1997『子どもと文化』久山社。
- 群馬県史編さん委員会, 1979「群馬日報」『群馬県史 資料編 19』群馬県, pp.615-809.
- 一柳廣孝, 1994『〈こっくりさん〉と〈千里眼〉』講談社。
- 一柳廣孝, 1999『『学校の怪談』のリアリズム』『童話学がわかる。』朝日新聞社, pp.86-89.
- 今井秀和, 2013「エンターテイメントとしての口寄せ」『世間話研究』(21), pp.40-50.
- 今泉寿明, 1992「『こっくりさん』を契機に発症した鑑別診断が困難な精神分裂病の1例」『臨床精神医学』21 (11), pp.1713-1720.
- 今泉寿明, 1995「『こっくりさん』に関する社会心理学的調査：1930年代から1992年までの流行史」『宗教と社会』(1), pp.29-48.
- 井上円了, 1900『妖怪玄談 第2版』哲学書院。
- 石田文四郎, 1934「コックリの流行とその源流(明治二十年四月二十四日発行郵便報知新聞所載)」『新聞雑誌に現れた明治時代文化記録集成 前編』時代文化研究会, pp.505-506.
- 板倉聖宣, 1978『科学的とはどういうことか：いたずら博士の科学教室』仮説社。
- 川村邦光, 1990『幻視する近代空間』青弓社。
- 川村邦光, 1997『憑依の視座 巫女の民俗学Ⅱ』青弓社。
- 河野圭司, 1892『古今博聞叢談』文林堂。
- 清岡暎一, 1958「母の昔ばなし」福沢先生研究『父論吉を語る』福沢先生研究会, pp.73-140.
- 小島百三, 1886『人身電気の図画：一名コックリサンの理解』小島百三。
- 小島百蔵, 1939『自分を語る』小竹書房。
- 近藤雅樹, 1997『靈感少女論』河出書房新社。
- 久場川哲二・土屋節子・丸山博, 1990「『こっくりさん遊び』で類精神病を呈した2症例」『小児科診療』53 (6) (608), pp.1459-1463.
- 日下部康明・中沢正夫, 1976「児童生徒に流行した『こっくりさん遊び』について-1-集団ヒステリーを招来した事例」『精神医学』18 (3) (207), pp.255-259.
- 桑原三郎, 1998『巖谷小波日記 [自明治二十年至明治二十七年] 翻刻と研究』慶應義塾大学出版会。
- 三田如雪, 1887「コックリ様」『明教新誌』(2167), pp.11-12.
- 望月孝, 1953「望月軍四郎：相場成功者列伝-1-」『実業の日本』56 (16), pp.100-103.
- 元森絵里子, 2009『『子ども』語りの社会学：近現代日本における教育言説の歴史』勁草書房。
- 村田誠治, 1898『神戸開港三十年史 下』神戸市開港三十年記念会。
- 武者小路実篤, 1942『望月軍四郎』試徳会。
- 中島節夫・山角駿・住吉秋次, 1976「コックリさん遊びの精神医学的考察」『催眠学研究』20 (2), pp.1-7.
- 中村花瘦, 1893「馬士」大橋新太郎『春夏秋冬 春の巻』博文館, pp.70-87.
- 中村希明, 1994『怪談の心理学』講談社。

- 日本民話の会学校の怪談編集委員会, 1996『学校の怪談大辞典』ポプラ社。
- 大道晴香, 2022「一九八〇年代の『こっくりさん』」一柳廣孝・大道晴香編著『怪異と遊ぶ』青弓社, pp.194-216。
- 大概義彦, 1995『学校の怪談に挑戦する』筑摩書房。
- 凌空野人, 1887『西洋奇術狐狗狸怪談：一名西洋の巫女』イーグル書房。
- 千家尊宣, 1979『『おみくじ』と『占い』』迷信調査協議会『日本の俗信1 迷信の実態』洞史社, pp.83-88。
- 高村光太郎, 1958「回想録」『高村光太郎全集 第10巻』筑摩書房, pp.3-51。
- 田辺夏子, 1950『一葉の憶ひ出』潮鳴会。
- 田中香涯, 1923『学術上より観たる怪談奇話』大阪屋号書店。
- 谷口流鶯, 1887『翠紅奇縁：学芸小説』金港堂。
- 寺田寅彦, 1938『寺田寅彦全集 文学篇 第12巻』岩波書店。
- 坪内逍遙, 1933『柿の蒂』中央公論社。
- 上田捨吉, 1886『蜃気楼：寓意小説』駸々堂。
- 山本文雄, 1998『日本マス・コミュニケーション史[増補]』東海大学出版会。
- 柳田国男, 1990「小さき者の声」『柳田国男全集22』筑摩書房, pp.335-457。
- 安丸良夫, 1979『神々の明治維新』岩波書店。
- 吉岡一志, 2021「子ども文化論再考」『子ども社会研究』27, pp.163-183。